

界には本山というものがなく、宗派と言つてもラマ教黃教派一本槍で、舊教である紅教派は殆んどないので、その點教界は極めて平穩である。本山の代りに喇嘛印務處というのがあつて、内蒙第一の格式を誇るドロソールの廟がその掌印札薩克ラマであるが、疆内の寺廟を末寺として統轄する權利はない。主な廟には大抵ラッサンと呼ばれる學部があり、それにチョイリ(顯教學部) Judyowa(密教學部) マンバ(醫學部) デンホル(時輪教學部) の四ラッサンがある。この四つの揃つてゐるところは少く、その外ラムリム・ラッサンのあるところもある。五當召廣覺寺はこの學部の最も完備した内蒙一の學問寺である。ラマの最も多い寺は貝子廟で、ここには九百名のラマが居り、ラマ廟の壯麗なる偉觀は草原に於ける盛氣樓のように美しい。昔はラマは蒙古のすべての男子の半分以上もいたし、その寺領は王侯の領分と共に、殆んど全蒙古の土地を掌握していたといわれる位で、蒙古の住民はそのシャビナル——家來で信者だから、ラマは生殺與奪の權を握つていた。

蒙古人の信仰は殆んど狂信的で、實に敬虔そのものである。念佛としてオム・マニ・パド・メ・フーンの觀音信仰の眞言を唱える。その思想は般若系で、輪廻轉生を深く信じ、彌勒の淨土シャンバラの出現を信じ、そこへ往生することを無上の誓願としてゐる。信仰對象としては色々あるが、歡喜佛は我々人間に最も有力な佛縁ある佛であるが、我々日本人が考へてゐるように、姪猥だとは彼等は考へてゐない。それは大樂を超脱した無欲の象徴である。

鎌倉幕府に於ける落雷事件について

寺西惠然

鎌倉幕府に於ける寛喜二年六月十四日の落雷事件に就ての大評議が吾妻鏡に記されて居る。

十四日甲戌。風雨甚。相州。武州。武州に被參。御所著西廊給。助教師員隱岐入道行西。駿河前司義村。民部大夫入道行然。加賀守康俊。彈正忠季氏

等。候。其例。依去九日雷事。可令避御所給。否。將又被行御占。就吉凶。

以下長文がつづられ文章は可なり澁滞して居るが、この文に依つて落雷の吉凶が重大事となつて居ることが判明する。其の爲め幕府の要人が長時間を費して評議をして居るのである。相州は北條時房であり武州は同泰時で助教は所謂陰陽寮の事務官で長官頭教に従ふ次官である。次に幕府要人の入道行然は嘗つて聖覺法印を鎌倉に招聘し又鹿嶋神宮へ一切經を奉納した奉行で佛教厚信の人物である。康俊は三善善信の息で幕府の文官である。此等數多の人々に依つて落雷の場所是如何にすべきか凶ならば其所の建造物は撤去して他に轉すべきであると甲論乙駁し先例の穿鑿にまで及び季氏は醍醐帝の時、清涼殿に落雷し大納言清貫、中辨希世が雷火に焼死したと表現すると行西はそれは不吉なりと斷定して居る。それに對し助教は數多い關東武士に左袒し頼朝奥州攻略の時、陣中に落雷し又承久兵亂の時、義朝の釜殿にも雷落ちしも何れも皆な吉

事であつたと決し怪異に非らざる事を言明し論戰は火花を散したのである。此處に關東と關西の意見の相異が發見され又公家文化と武士文化の相剋があざやかに織り出されて居る。又これによつて幕府要人の精神生活が窮はれ又淨土教の宗教意識の淺深が讀みとられるのである。宗教が如何に攝取されて居たか、淨土の信仰が何處にまで達して居たか實にこの落雷評議はそれ等を知る尺度となるのである。

幕府も頼朝時代は關東獨特の文化創立に燃えて居たが頼朝薨じ頼家そのあとを繼ぎ實朝の時代に來ると様相一變して公家文化に泥み實質剛健の氣風うすらぎ迷信に怯ゆるようになって來た。寛喜二年はその實朝も他界した北條泰時の時代である。

關東は由來落雷の多いところであるが、何故それを吉であり目出度いと云ふかそれは關東農民は雷神をば無盡の甘露雨を抱擁して農民を潤す神として尊ぶのである。和各抄には雷神をい。かづち鳴神として居る。次に關西では大鏡に『菅公神にならせたまひ』と云つて雷を人間

の怨靈として崇をなすものとして居る。尙、雷は霹靂と云つて目出度いと云ふ古い實例をあぐると眞俗雜聞集(仁和寺八)に

霹靂木は『イカツチノフミヲリタル木ヲ云フ』

と云つて佛師が神聖化して雷火で枯れた大木を選んで佛像を造りそれから神像をつくつたのである。吾妻鏡の本文の中に去十九日雷落事。若雖有可忌之事一於關東先例一者。還可謂吉事一歟。と關東では吉事であると云つて居る。

教行信證の思想的體系の研究

蓬 茨 祖 運

教行信證の思想的體系については從來教卷より見れば二廻向四法、化卷より見て三願轉入を基底とする三々法門と云ふ所から、是を唯、神學的に考察する事が主眼となつて其の根底を流れて居る祖聖の佛教史觀が閑却されて居た嫌ひがある。その爲に祖聖の教義が善導法然系より曇鸞教學に轉して行つたとか、又三願

轉入の時機の問題等が種々に議論せられる様になつた。然しそうした見方は概して祖聖教學を外面から眺めての分段的所論で、その結果祖聖を特定の一個人として扱ひ、選擇より廻向への考察も三願轉入の考察も祖聖の個人心理を對象とする經驗心理學的な結論に終らざるを得なくなつて來るのである。

然るに祖聖の立場は序分より見ても、又製作の意趣より見ても、個人を超へて全人類の道としての眞の佛道に遭遇した所より始つて居る。其の事は恩師源空の文が後序に於いて無上甚深の寶典と絶讃されて居るに拘らず本文中、行卷に唯一ヶ所引かれて居るのみである事を見ても、法然との關係が單なる個人的遭遇でなく、人類の底を流るゝ眞の佛道たる念佛の歴史との遭遇であつた事が知られるのであり、そしてそれ故にこそ祖聖の言葉が時代を距てた我等の心魂を強く打つのである。祖聖の教學は單なる法然教義の擁護では無かつた。

それは源空の淨土宗獨立が佛教史の轉廻と云ふ大きな歴史的意義を帯びて居る事に覺醒されたからであつた。そこに轉